



山に囲まれた道場。朝の自然光がさしこみ、開放された室内に南風が吹き込んでいた。講師を囲ぶみんなは、ヨガの瞑想ポーズをしている。静かな沈黙が、座禅をくんだ大人たちの細胞を活性化しはじめる。道場のまわりでは、子供たちの掛け声、笑い声が響きはじめ、笑い声が大きくこだましている。

このヨガ道場は、宮崎の加江田溪谷につくられたものだ。ヨガに参加している大人たちは全員が、IT業界で活躍している起業家とその妻。外で遊んでいるのは、彼らの子供たちなのである。

東京六本木ヒルズ。

このビルで働く若手起業家たちを、「ヒルズ族」とよぶのは、201×年になったいまも変わらない。しかし、働き方が00年代とはまったく変わった。

儲けた金で六本木を豪遊する——そういうスタイルは、肉体を疲弊させ、せっかく仕事に燃えている知性に誘惑をあたえる。非効率的なものに、敏感な成功者たちは2014年になると、昔のように豪遊しなくなった。

そのかわり週に2日東京で働いたら残りの5日間、家族をつれて宮崎直行便に乗る。

このスタイルが、いまでは成功者の法則になっている。高級なシャンパンと美人ホステスに囲まれた会談から、山も海もある宮崎の大自然でおこなう家族ぐるみのバーベキューへ。

毎朝、株価や取引先とのメールで疲れてしまった目、同じ姿勢のまま血のめぐりが悪くなった体を、宮崎加江田溪谷でおこなうヨガや森林浴で癒す。

201×年の六本木の社長たちは、週休2日という考え方をやめた。毎日、仕事をする。毎日、家族と遊ぶ。毎日、元気にいきる。仕事と家族、仕事と休日——そんな考えかたは、せっかく温まったエンジンをまた冷やすようなものであると気がついたのだ。

5日間を宮崎ですごす彼らは、朝はヨガをしたり、夜は、異なる業界の専門家たちと家族ぐるみでバーベキューをするが、昼は仕事をする。夫婦共ばたらきの起業家たちも、ここでは安心して子供の面倒をみてもらえる施設がある。

「起業家が集まると、街が栄える」という法則どおり、いまでは宮崎に欧米、アジアのブランドショップが出店をはじめているので、大自然と買い物が同時にできるとあって、専業主婦の奥さんたちもご機嫌である。夫たちは、「家族サービス」を気にすることなく昼の時間を、宮崎で存

分に仕事する。

最新鋭のデジタル施設や、必要なものを直行便で即日に入れられるための輸送業者直営会社が集っているIT宮崎地区。彼らはここに事務所をかまえている。首都よりも各分野の人脈がそろっているので、週7日宮崎で働く業界人もうまれているという。

日本のシリコンバレーといわれはじめた宮崎。本家サンフランシスコのことを、アメリカのMIYAZAKIとよぶ声もある——こんなジョークがうまれるほどの都市が日本に完成した。

国外に流出していた優秀な人材たちも、みな外国からぞくぞくと帰国している。宮崎ITセンターを東京本社のつぎの拠点とした動きが加速していて、知事は、宮崎県をMIYAZAKIと英語表記にしたい、という提案を国会に提出した。いまや、IT都市をこえて、世界のMIYAZAKIが生まれつつある。

しかし、IT都市MIYAZAKIは、行政主導で自然にうまれたものではなかった。地方に注目が集まりはじめる何年も前に、国分寺の小さなアパートの一室で起業した男がいたのである。

JUNこと工藤潤一。彼が動いていなかったら、いまも宮崎県は「食」だけで勝負する都市だったかもしれない。

「TOKYOとMIYAZAKI、アメリカにおけるNYとLA。なにか似ているなあ」

JUNの直感は、これまでいつも行動にむすびついてきた。「見るまえに、とべ」の精神である。まだスマートフォンが開発される前、携帯電話さえ日本では普及していなかった時代、JUNは思いついた。

「これから、パソコンをつかったネットワークが日本の未来をかえる」

当時、JUNはパソコンが得意だったわけではない。けれど、「パソコンだったら、アメリカだ」という直感を行動にうつす才能をもっていたJUNは、気がいたらアメリカの西海岸にいた。英語も話せなかった。プログラマーでもなかった。けれど、「日本の未来はパソコンにある」という自分の直感を信じた。がむしゃらに動いた。

そのJUNが創世期のシリコンバレーで、携帯電話を扱う部門を担当して、メキメキと頭角をあらわしていったことは、今では知る人ぞ知る伝説となっている。全米に携帯電話が広がった影に、日本人の若者JUNがいたのだ。

しかし、JUNの目的は「大金持ち」ではない。「アメリカを活性化させる」ことでもない。「パソコンをつかったネットワークが日本を変える」という思いだった。JUNの直感はまたしても、JUNにささやいた。

「アメリカで学んだITが、日本の地方を活性化する」

こうして、アメリカで得た地位、安定した収入のすべてを捨てて、「見る前にとぶ」男、JUNは日本に帰国したのだ。国分寺の小さなアパートで、壁に貼った日本地図を眺めながら、つぶやいた一言が、JUNの覚悟を決めた。

「TOKYOとMIYAZAKI、アメリカにおけるNYとLA。なにか似ている」

実力があれば、すぐに大きな仕事を任されるアメリカと日本はちがう。JUNがIT都市MIYAZAKIを軌道にのせるまでに、時間がかかった。日本政府を動かすだけの力をつけるため、「行政と民間、一般市民」の垣根をはらう＜街飲み＞イベントを各都市で成功させたり、その都市の知事や市長たちと徹底的に地方の未来について議論を重ねる経験を積んでいった。それが、IT都市MIYAZAKIの成功には欠かせない。

「机にすわっての勉強だけじゃ、人は動かない」

ヨガ教室からでてきたJUNが、テレビカメラをもった取材人にむかって、ぽつりと言った。

201×年11月第1日曜日深夜。JUNは「熱情大陸」という番組で特集される。心に情熱をもつ日本人の多くが、明日からの一週間をがんばるために、みている番組だ。その取材のために、何人もの精鋭スタッフがJUNと、IT都市MIYAZAKIを密着取材するためにやってきたのだった。

メインプロデューサーが、つぶやいた。

「どうして、JUNをいままで取り上げていなかったんだ……」